

鈴木 博之 (2020) 『言語記述論集』 12: 43-50

[書評] 仁増旺姆 (著) 《迭部藏語研究》

北京：中央民族大學出版社、2013 年、3+245pp. + 1 地図

鈴木 博之

国立民族学博物館

キーワード：チベット系諸言語、方言学、音声学、歴史言語学

1 本書の構成

本書は中国甘肅省迭部県で話される 3 つの方言に関する音声、音韻、語彙および文法の概要を記述し、これら 3 つの方言の比較研究を加えたものである。付録に 3 方言それぞれの約 2100 語の語彙集が付属する。本書で言及される方言資料は著者が現地調査を行い記述したものである。全 5 章および付録 2 編に分かれ、これに黄布凡による序文、ならびに目次、参考文献、あとがきが加わる。全 5 章の内容は次のようである。

- | | |
|------------|------------|
| 1. 序論 | 4. 洛大方言の概況 |
| 2. 電尕方言の概況 | 5. 比較研究 |
| 3. 旺藏方言の概況 | |

本書の基本的な方法論はチベット語方言の記述的研究に重点を置いているけれども、研究の動機と目的は、序論に示されるように (pp. 11-12)、方言の帰属を確定するという点が含まれていることから、歴史的、通時的研究を念頭に行われている。これはチベット言語学 (西田 1970:xv の記述を参照) では通常のことである。チベット語の方言記述においては、共時的記述とともに、方言形式とチベット文語形式 (以下「藏文」と) の対照を通じて通時的な音対応を明らかにする作業が付属する。本書は共時的な記述研究に重点を置いているため、藏文との対照は全面的には行われておらず、必要な個所を述べるにとどめているが、付録 1 の語彙集 (pp. 143-234) にそれぞれの口語形式に対応する藏文が添えられており、資料的価値がある。

本書評では、著者によって明らかにされた迭部県のチベット語の特徴について簡潔に検討を加えるとともに、本書がもつ全般的な問題点を提起し、評者の考えを合わせて述べていく。

2 本書の問題提起および方法論の検討

本書の問題提起および方法論ならびに提起された問題に対する考察の結果は第 1 章 (序論) で表明されている。《迭部県誌》(1998) の記述によると、同県内には 6 つの異なる方言群があるとされ、本書はそこからそれぞれ異なる方言群に属する電尕方言、旺藏方言、洛大方言の記述を提供している。これら 3 つの方言の記述を同時に提供することで、迭部県チベット語の多

様性について共時的側面から一定の具体的な特徴をつかむことができる。

一方で著者が迭部県の方言を研究するようになった経緯には、通時的な関心もまた認められる。それは、同地域の方言がアムド地域にありながらアムド方言とは異なる言語特徴を持っているという、先行研究でも述べられていることがあるほか、これらがチベット語の中で方言所属が未確定である点も指摘できる。また、特に後者の問題点にこそ研究の意義があると強調する (pp. 4-12)。第1章の言語学的な記述はほぼ通時的考察によって占められているといっていよい。ここで述べられる通時的考察の結果と主張は第5章(比較研究)を踏まえている。ただし、参照ページや具体例が付されていないため、結論に至った経緯が不明瞭に見える点は不親切であろう。

評者は以上の問題意識については妥当であると考ええる。しかしながら、本書の記述と考察を見ると、この疑問を解決するための方法論が適切であるとはいえない。このように判断するのは、本書の通時的考察に対する姿勢がこれまでの中国で行われてきた「3大方言(ユー・ツァン、カム、アムド)」を主軸とするチベット語方言研究と同様の考察過程を踏襲しているためである。具体的には、方言所属を考えるにあたって最も重要な役割を果たすであろう「共通の改新」に関する認識が歴史言語学的な取り扱いとは異なっている点が指摘できる。たとえば、迭部県の諸方言に認められる音体系が別の方言(群)と類似しているからといって、両者の類似性が必ずしも「共通の改新」を経て成立したとは断定できないはずであるが、本書を含め多くの中国のチベット語方言研究がそれをめぐる議論を欠いている。したがって、評者は著者の「迭部県の諸方言はカム方言に属する独立した下位方言群に分類すべき」(p. 11)という見解には同意できない。本書には黄布凡による序文が付されているが、そこでは著者の資料が豊富で分析が詳細で合理的であると評している点も、やはり理解しがたい。こういった問題意識は中国国内の研究者にはほぼ認められないため、仕方のないことであるかもしれないが、読者は十分に気をつけておく必要がある¹。

以下に、書評読者の理解のため、2つの問題を提起しておきたい。

(1) 方言区分に関する問題

カム方言は内部分岐が激しく、Tournadre (2014)の主張に見られるように、「カム方言」が方言レベルで1つのまとまりをなすとは考えるのは合理的ではない。Tournadre (2014)において言及されるカム方言の変種数は中国で知られているものより詳細で、さまざまなチベット言語学上の新事実が含まれている。また、Sun (2003)、Tournadre (2008)、鈴木 (2009)などの先行研究は、中国大陸部のチベット語方言研究の枠組みに対してさまざまな視点から問題を提起している。評者は、これらの研究の意見を踏まえ、中国大陸部で行われているチベット語方言研究の枠組みから早急に脱却すべきであると考えている(鈴木 2014, 2016a; Tournadre 2014 もあわせて参照)。確かに、これらの研究および主張は中国大陸部では主流ではないため、著者の枠組みには沿わないものである。しかしながら、本書の読者はより客観的な立場にたって、著者

¹ なお、評者の迭部県を含む地域のチベット系諸言語をめぐる分類に関する見解は、鈴木 (2015, 2016a) および Tournadre & Suzuki (forthcoming) で示してある。

の、ひいては中國大陸の研究者による研究の枠組みそのものが有効であるかどうかをよく検討すべきである。

評者が著者の「迭部県の諸方言はカム方言に属する独立した下位方言群に分類すべき」という主張に同意できない具体的な理由として、次の点を指摘したい。それは著者のカム方言についての理解が不十分だと考えられる点である。本書 p. 5 の記述に従うならば、カム方言の特徴は格桑居冕、格桑央京 (2002) の記述に基づいていると読める。この文献の記述は確かに他の文献よりはカム方言の多様性を反映しているが、これをもってカム方言の全容を理解することはできない。また、この問題点は、著者の本書に先行する論文 (仁増旺姆 2012) にも見て取ることができる。この論文において、著者は存在動詞 *snang* の分布について地名を列挙しているが、カム地域に分布する方言の中で著者は巴塘方言のみを挙げている²。しかしながら、*snang* を用いる方言は、巴塘方言をはじめ、甘孜州南部および木里県ならびに迪慶州などで話される諸方言ほぼすべてが該当し (鈴木 2014, 2016b)、またチベット自治区昌都市南部、林芝市東部一帯の諸方言にも認められる³。評者は、著者のこのような記述に見られる問題を根拠に、著者のカム地域のカム方言に対する理解が十分ではないと判断する。これが本書の考察にも流用されている点 (p. 10) を見ても、この批判は的を射ているといえるだろう。

本書において著者は迭部県の方言がカム方言と類似する具体的な例として、次のようなものを挙げている：子音の総数、前鼻音の有無、有気/無気の対立、摩擦音音素、無声鼻音、蔵文 *my* の音変化⁴、蔵文 *zl*, *sl* の音変化、母音の総数、二重母音、音節末子音、声調の有無、音節の縮約、蔵文足字を含む形式の音変化、母音+末子音の豊富な対応関係、音節末子音の変化、母音調和、声調発生の構造 (pp. 5-11)。加えていくつかの語彙の特徴も挙げている。評者はこの中で、声調発生の構造について特に注目したい。本書における声調の記述については本書評第3節で検討したいが、具体的にどのような現象がカム方言と共通するのか、実際の例を欠いているため、本書の範囲内では判断がつかない。また、「声調」という用語が厳密にどのような音声現象を表しているのか記述がないのも問題である (朱曉農 2010 参照)。加えて、蔵文足字を含む形式の音変化が多様で複雑である点がカム方言と共通するという論理は、理解に苦しむ。鈴木 (2009) などは「音変化が複雑であるがゆえにカム方言の内部分岐を明らかにしなければならない」と考えている。「複雑である」ことをそのまま「共通の改新」ととらえるのは無理であるだろう。また、これらの指標の多くは瞿靄堂、金效静 (1981) や西 (1986) などの先行研究でも述べられているが、これらの基準は方言の類型特徴に基づく分類であるという点に注意が必要である。

² チベットの伝統的地理区分としての「カム」を指す。四川省甘孜州、雲南省迪慶州、チベット自治区昌都市に相当する地域のことである。著者は当論文において、巴塘方言に続いて「その東に位置する方言所属が未定の方言群」も挙げている (仁増旺姆 2012:111) が、これらは本書が扱う甘肅省南端に分布する、中国のチベット語方言分類でいうところの「カム方言」を指しており、カム地域に分布するその他の方言への言及はない。

³ 評者の未発表調査資料による。

⁴ 著者は蔵文と口語の対応関係を「音変化」としているが、厳密には「音対応」と呼ぶべきであろう。

(2) 音変化の理解に関する問題

以上のような方言研究の大枠に関する問題のほかに、本書の通時的考察にもまた重大な問題点が認められる。著者は、上に述べた蔵文足字を含む形式に関する言及において、「『漢族』『鳥』… (中略) … は迭部チベット語上迭方言の中で歯-歯茎音になるが、これらの語において足字 *y* が上迭方言では *r* に転化したことを物語っている」(p. 8)⁵ と述べている。説明の際に音声形式など具体例を添えていない点は不親切であるが、ここで言いたいことは、たとえば電尕方言における /dza¹²/「漢族」(蔵文 *rgya*) や /sa¹²/「鳥」(蔵文 *bya*) のような音対応のことである。これについて参照点とすべき現象に、蔵文足字 *r* を含む例が挙げられる。たとえば、/tsha⁵¹/「血」(蔵文 *khraḡ*) や /sa⁵⁴/「髪」(蔵文 *skra*) のような例がある。著者は (p. 8) の説明において、足字 *r* を伴う例が歯-歯茎音と対応する例を参照しつつ、足字 *y* を伴う形式に対応する口語が成立する前に、*rgya* > *rgra* > /dza/ および *bya* > *bra* > /sa/ という音変化を経たと主張したいようであるが、江荻 (2002) や張濟川 (2009) などを参考にすれば、このように音変化を仮定するのは極めて異例であると理解できる。特に *bra* と /sa/ が対応する事例は他の方言には認められず、一方 *bya* と直接に対応する例は、たとえば九寨溝風景区の方言 (鈴木 2008b) や郷城県の方言 (鈴木 2007) などに散見される。それでは以上の例についてどのように解釈を与えることができるだろうか。以上の事例は足字 *y* をもつものの音対応が足字 *r* をもつものの音対応に合流したというのが著者の解釈であるが、おそらくは王雙成 (2012) も指摘するように、蔵文でそもそも足字 *r* をもっている例のいくつかは足字 *y* をもつ形式に対応するものであった可能性がある。すなわち、蔵文 *skra*「頭髮」の *r* 部分が *y* になった *skya* という形式を経て、/sa⁵⁴/ (p. 157) というように、上に掲げた歯-歯茎音との音対応になるという過程を経ているものと考えられる。これは多くのアムド方言で認められる現象である (王雙成 2012) が、これと並行する現象が迭部県の方言にも見られると解釈するのが妥当であるだろう。この意味で、カム方言にのみ注目するのではなく、アムド方言も参照する必要性があることも指摘できる。

さて、著者は一方でチベット語の方言研究を地理上の分布関係に基づいて行う姿勢をとっている。そして、それが先行研究でも言語系統が問題になっているペマ (白馬) 語 (西田・孫 (1990)、張濟川 (1994)、黄布凡、張明慧 (1995)、孫宏開等 (2007) などを参照) の言語学上の位置を確定することにつながるという見通しを述べている (p. 11)。同様の問題意識と研究の方向性については鈴木 (2008b) がすでに述べている。四川・甘肅両省の境界に分布する、いわゆるアムドチベット語とは異なるチベット語方言群の中で、迭部県の諸方言がその地域の中心位置を占めるという地理的条件もまた、著者が迭部県を研究対象にした理由に数えられる。このような視点は、これまでの中国のチベット語方言研究に見られないものである。評者は本書がこのような問題意識を表明している点を高く評価したい。

⁵ 一部用語に関しては書評読者のことを考えて、直訳ではなく同義の用語に置き換えた。

3 本書の記述研究の検討

本書の主たる記述の対象は、迭部県で話される電尢、旺藏、洛大各方言の音声、音韻、語彙であるが、個別の方言の記述においては、簡単な文法スケッチが付属しており、形態統語の方面についても一定の情報を提供している点で、非常に興味をそそられるものとなっている。ただし文法スケッチはやや簡略すぎる感があり、記述にもう少しページを割いてもよかったかと考える。また、各方言の記述の分量はバランスを欠いており、第2章で扱われる電尢方言の記述が最も多く (pp. 13-50; 計 38 ページ)、次いで第3章の旺藏方言 (pp. 51-77; 計 27 ページ)、第4章の洛大各方言 (pp. 78-102; 計 25 ページ) と続く。少なくともこれら3種の方言は、第1章で紹介されるように異なる方言群に属しているのであるから、それぞれの記述の分量を平均的に行うほうが公平であると考ええる。特に声調をめぐる記述については、電尢方言が最も詳細で、残りの2種は簡潔にとどまっている。研究書としての形態から考えれば繰り返しを避けたものと考えられるが、資料性の高い書物においては、それぞれの変種の記述は独立して行われるべきであろう。

付録1の3方言の語彙集についてみると、資料的価値は確かに高いものの、1つの重大な欠陥が認められる。それは動詞の形態変化に関して何の情報も記載されていない点である。先行する文法スケッチには、すべての方言について動詞の形態変化が認められるという記述がある (pp. 41, 72-73, 100)。語彙表に書き込むのが困難であれば、別に独立した表を設け、動詞の形態変化を丁寧に記述すべきであっただろう。

具体的に見ると、本書の音声記述は整然としているが、記述方法や音韻分析に関して、疑問が残る点も少なくない。

まず指摘すべき点は、音声学の用語である。本書の用語は中国大陸部で広く通用しているもの (《方言調査字表 (修訂本)》1981:81 など参照) に従っているため、中国の音声学の用語に慣れていない場合、読解に労を要する。特に第1章では解説中に現れる用語に対し音標文字が付されているわけではないため、中国の独自の用語体系を理解するのに時間がかかるかもしれない。第1章には著者にとって重要な主張が含まれているため、音標文字を添えておくほうが理解しやすかったと考える。また、読者はこの種の用語を踏襲する必要はなく、朱曉農 (2010) などを参照して適切な用語に置き換えて理解するほうが読みやすいだろう。

次に第2～4章で行われる3種の方言の音声記述について見ていく。分節音の表記に関して特に指摘しておくべきものは、電尢方言の /ɬ/ (p. 13)、/ə, (ɿ, ʏ)/ (p. 15) と旺藏方言の /a, (e)/、/ə, (ɿ)/ (p. 53) という記述であろう⁶。著者は実際の音声実現をできる限り記述に反映しようとする姿勢で記述しているが、/ɬ/ は実際に摩擦音であるかは問題があるため、解説が必要になる点である。この問題は張濟川 (2009:278-282) に記述がある。次に表記の上で () に入っている [e, ɿ, ʏ] は音声学的な変異であると明記されているものの、語を表記する際には実際の音声に近いよ

⁶ 本書の記述では / / が記述されていないが、これらの記述を音素表記と理解し、本書評の文中では / / を付加して掲げている。

うに記述されている。この措置が必要であるかといえば、音韻表記を重んじる読者は簡素化した記述を望むだろうが、チベット語方言学上の資料的価値という面から見れば必要であると評者は評価する⁷。本書は方言比較が最終的な考察になっているため、細かい方言差異も省かずに示しておく必要がある⁸。しかしながら、p. 28 などに見られる [ɾ] という表記については疑問が残る。/r/は本書の記述 (pp.14, 52, 79) にあるように、「実際の音価は [z]」というようにそり舌音であるから、後続の子音性母音はそり舌性を伴う [ɿ] を用いるほうが適切ではないかと考える⁹。

著者は記述対象の3つの方言について、すべてに5つの声調対立を認める一方、母音には長短を認めていない。このうち電尢方言については、長短と声調の調類を絡めて記述している (pp. 17-20)。このような記述の仕方は珍しいものではない (格桑居冕 1985、黄布凡等 1994 など) が、方言比較という面から見ると、母音の長短と声調 (ピッチ) は分けて記述するほうが現象の多様性を直接的に記述に反映できるという利点がある。また、ピッチを5度制で記述することによって、著者は電尢方言の記述について大量の変調パターンを記述することになっている (p. 20-22)。そもそもこれは超分節音の弁別特徴をピッチととらえるがゆえに起こった複雑さではないか。そして、ピッチのみが超分節音の対立を形成しているのか。代替する記述・分析方法はなかったか検討が必要とされる。もちろん、この問いは、中国におけるチベット言語学の研究においては、依然として主流にはなっていない。朱曉農 (2010) の声調と発声類型を組み合わせた理論的枠組みをチベット言語学にも適用していくことが求められる¹⁰。超分節音をいかに分析するかという問題は、少なくとも本書の記述の範囲で解決できる性格のものではない。ピッチによる分析では、著者が第5章で行っている調値と調類の対照 (pp. 127-133) などで有効に機能しているのも事実である。以上に指摘した問題点は、これからの記述研究においてさらに議論していくべきものである。

4 まとめ

本書の記述を総合して考えても、著者は中国、特に大陸のチベット語研究における伝統的な方法論と視点は一般に認知される方言研究とは異なっている、ということに気づいていないと評者は見る。本書の最大の問題点はそこにある。しかし評者は、それでもなお、本書が迭部県というチベット語分布地域の周縁部を取りあげ、かつ地域を単位にとらえるというチベット言語学以外では当然とされる方言研究を実践して成果を提出した点を高く評価するものである。

言語学的記述研究としては、チベット語方言研究の伝統的な手法を踏まえつつ、共時的記述と蔵文を利用した通時的分析を行う点に異論はない。しかしながら、通時的分析を踏まえて、

⁷ 評者の音韻表記における [ɿ] と [ɿ] の書き分けについては、鈴木 (2018) をあわせて参照。

⁸ このような措置の必要性については、Suzuki (2016) を参照。

⁹ たとえば電尢方言に /ɾ³³lɔ³¹/ 「球状のもの」という例があがっている (p. 28)。もちろん、実際の音価が [ɾ] であるならば、それ自体興味深いものではある。

¹⁰ 本書の扱う迭部県を取り巻く地域に分布するチベット系諸言語には、ピッチ以外の超分節音特徴を見せると分析されるものが多く存在する (孫天心 2003; 鈴木 2007b, 2008ab; Suzuki 2008, 2015)。

個別方言の研究から議論の対象となる方言の方言所属を解決しようとするのは無理がある。音変化の「類型的な類似」と「特徴的な刷新の共有」とは意味が異なる。方言所属の問題は単に言語学の問題にとどまらない。特に相当離れた地域に分布する複数の方言群が1つの方言に属することを示すためには、歴史や文化の共有といった側面からの「傍証」も検討する必要がある。少なくとも言語学研究においてできることは、音変化の類型的な類似が共通の刷新を経て成立したものであることを示すことであろう。方言所属を議論するならば、相当な地点数の方言から資料をとったり、ある言語の方言とされるすべての変種を鳥瞰するような資料を参照する必要がある。個別研究の深みも重要であるが、俯瞰的な立場から各方言を眺める立場を忘れるべきではないということを喚起して、本書評をしめくくる。

参考文献

- 鈴木博之 (2007a) 「甘孜州郷城県カムチベット語の方言特徴」『ニダバ』第36号 17-26 電子版：<http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045548>
- (2007b) 「チベット語包座 [Babzo] 方言の音声分析とその方言特徴」『アジア・アフリカ言語文化研究』第74号 101-120 電子版：<http://hdl.handle.net/10108/42695>
- (2008a) 「ヒャルチベット語九寨溝・玉瓦 [gZhungwa] 方言の音声分析」『アジア・アフリカの言語と言語学』第3号 135-168 電子版：<http://hdl.handle.net/10108/51104>
- (2008b) 「九寨溝風景区のチベット語とペマ語をめぐる若干の問題」『アジア言語論叢』7, 91-107 電子版：<http://id.nii.ac.jp/1085/00000593/>
- (2009) 〈川西地区“九香線”上の藏語方言：分布與分類〉《漢藏語學報》第3期 17-29
- (2014) 《藏語方言學研究的基礎問題：以木雅熱崗地區為例》中国社会科学院民族學與人類學研究所人類學論壇第五十六講論文（北京）[改訂版：〈藏語方言學研究的基礎問題〉《東方藏區諸語言研究》3-18、2015年、四川民族出版社]
- (2015) 「甘南州卓尼・迭部・舟曲3県のチベット系諸言語とその下位分類試論」『ニダバ』第44号 1-9 電子版：<http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045560>
- (2016a) 〈藏語方言學研究與語言地圖：如何看待“康方言”〉《民族學刊》第2期 1-13+92-94
- (2016b) 〈試論東方藏區藏語土話的語法地圖：以判斷動詞與存在動詞為例〉甘于恩主編《從北方到南方：第三届中国地理語言學國際學術研討會論文集》111-122 科學出版社
- (2018) 「香格里拉市北部のカムチベット語諸方言の方言特徴とその形成」『アジア・アフリカ言語文化研究』第95号 5-63 電子版：<http://doi.org/10.15026/92458>
- 西義郎 (1986) 「現代チベット語方言の分類」『国立民族学博物館研究報告』11巻4号 837-900+1 地図 電子版：<http://doi.org/10.15021/00004359>
- 西田龍雄 (1970) 『西番館譯語の研究—チベット言語學序説—』松香堂
- (1987) 「チベット語の変遷と文字」長野泰彦・立川武蔵編『チベットの言語と文化』108-169 冬樹社
- 西田龍雄、孫宏開 (1990) 『白馬譯語の研究 白馬語の構造と系統』松香堂

- Suzuki, Hiroyuki (2008) Nouveau regard sur les dialectes tibétains à l'est d'Aba : phonétique et classification du dialecte de Sharkhog [Songpan-Jiuzhaigou]. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 31.1, 85-108. doi: 10.15144/LTBA-31.1.85
- (2015) Esquisse phonétique du tibétain de dGonpa : un dialecte parlé à mBrugchu. *Revue d'études tibétaines* 33, 231-249.
Online: http://himalaya.socanth.cam.ac.uk/collections/journals/ret/pdf/ret_33_07.pdf
- (2016) In defense of prepalatal non-fricative sounds and symbols: towards the Tibetan dialectology. *Researches in Asian Languages* 10, 99-125 Online: <http://id.nii.ac.jp/1085/00002195/>
- Tournadre, Nicolas (2005) L'aire linguistique tibétaine et ses divers dialectes. *Lalies* 25, 7-56.
- (2014) The Tibetic languages and their classification. In Thomas Owen-Smith & Nathan W. Hill (eds.) *Trans-Himalayan Linguistics: Historical and Descriptive Linguistics of the Himalayan Area*, 105-129. Berlin: Walter de Gruyter.
- Tournadre, Nicolas & Hiroyuki Suzuki (forthcoming) *The Tibetic languages: An introduction to the family of languages derived from Old Tibetan* (with the collaboration of Xavier Becker and Alain Brucelles for the cartography). Paris: CNRS Éditions.
- 迭部県誌編纂委員會 編 (1998) 《迭部県誌》蘭州：蘭州大學出版社
- 黃布凡、索南江才 [bSod-nams rGyal-mtshan]、張明惠 (1994) 〈玉樹藏語的語音特點和歷史演變規律〉《中國藏學》第 2 期 111-134
- 黃布凡、張明慧 (1995) 〈白馬話支屬問題研究〉《中國藏學》第 2 期 79-118
- 格桑居冕 [sKal-bzang 'Gyur-med]、格桑央京 [sKal-bzang dByangs-can] (2002) 《藏語方言概論》民族出版社
- 瞿靄堂、金效靜 (1981) 〈藏語方言的研究方法〉《西南民族學院學報》第 3 期 76-84
- 仁增旺姆 [Rig-'dzin dBang-mo] (2010) 〈迭部藏語音節合併現象及其聯動效應——兼述周邊土語的類似音變〉《西北民族大學學報（哲學社會科學版）》第 6 期 83-89
- (2012) 〈藏語存在動詞的地理分布調查〉《中央民族大學學報（哲學社會科學版）》第 6 期 110-113
- 孫宏開、齊卡佳、劉光坤 (2007) 《白馬語研究》民族出版社
- 孫天心 (2007) 〈求吉藏語的語音特徵〉《民族語文》第 6 期 1-6
- 王雙成 (2012) 《藏語安多方言語音研究》中西書局
- 張濟川 (1994) 〈白馬話和藏語（上・下）〉《民族語文》第 2 期 11-24、第 3 期 53-67
- (2009) 《藏語詞族研究——古代藏族如何豐富發展他們的詞匯》社會科學文獻出版社
- 中國社會科學院語言研究所 (1981) 《方言調查字表（修訂本）》商務印書館
- 朱曉農 (2010) 《語音學》商務印書館

受理日 2020 年 4 月 13 日